

## 北西ドイツの旅

ドイツへは何回か旅行し、各地方の美しい自然、伝統的な街並み、中世以降の素晴らしい美術作品、また収容所跡など現代史に関わる遺跡等々を見てきた。もちろんおいしい食事とビールは旅の楽しみの中心ではあるが…。今回の旅行先として北西ドイツを選んだのは、昨年ポーランドのアウシュビッツ収容所を訪れた時に買った1冊の本がきっかけだった。ユダヤ人画家「ヌスバウム」、それまで聞いたことのない名だったがその絵に強烈なインパクトがあって、彼の生まれ故郷であり、「ヌスバウム美術館」のあるオスナブリュックをまず行先として決め、それに前から行きたいと思っていたブレーメンとハンブルク、さらにリューベック、ツェレを加え旅行日程を組んだ。ちなみにツェレ以外の都市は中世ハンザ同盟の一員であり、ハンザ同盟は13～16世紀にかけバルト海から北海、大西洋、地中海そしてロシアを通じて東アジアとも交易を結ぶ一大ネットワークを形成していた。

まず時計の反対回りで**ブレーメン**から回ることにする。ブレーメンはグリム童話の「ブレーメンの音楽隊」で有名で、市役所前にはロバ、犬、猫、鶏が順に上に乗っている像があって、この町の観光スポットでありかつ市のシンボルとなっている（写真①）。



「音楽」と縁の深いこの町の旧市街にあるリーベンフラウエン教会では、パイプオルガンの演奏会があるというので聞きに行ったが、古い教会堂に響き渡る荘厳な曲は心をひきつけ、30分余りの演奏に聞きほれた。これが無料（寸志）なのだからうらやましいものだ。第二次大戦の爆撃で破壊された旧市街はきれいに復元され、観光客を楽しませているその中に「バウラ・モーダーゾン・ベッカー美術館」があった。全く知らない女性画家だが20世紀初頭のドイツ表現主義に至る彼女の画風の変化がよくわかる展示だった。30歳ころの彼女の絵があまりにも暗いのはやはり時代の雰囲気なのだろうか。

ブレーメン乗り放題チケットで郊外に向かうトラムに乗っていると、落ち着いた住宅街で多くの人たちが集まりお祭りをしていたので途中下車した。どうやら夏至の祭りのようなものなのか地域の人たちがロックのライブを楽しみながらビールとワインを傾けていて楽しい雰囲気。夏の夕べを楽しむ人たちに混じってビールを飲むのも最高だった。

**オスナブリュック**はオランダにも近い交通の要衝だがそれほど大きな町ではない。旧市街のはずれにある「ヌスバウム美術館」は奇抜な建物で人々をひきつけ、館内にはナチス時代以前の明るいヌスバウムの絵から、次第に忍び寄る迫害、さらに亡命先のベルギーもナチスに占領され、隠れ家でいつ逮捕され収容所に送られるかわからない恐怖の中で描かれた絵が中心となってくる（写真②）。



そしてヨーロッパ解放間近についに逮捕され、最後の収容所行き列車でアウシュビッツに送られ殺されてしまう。彼のおかれた時代の過酷さがひしひしと伝わってくる絵画群だった。

この美術館が戦争と人権、平和をテーマとするゆえか、ヌスバウムの絵の間々にアフガン戦争の写真作品が展示されており、「特別展」を「常設展」と混在して展示する方法も新鮮だった。

**ツェレ**はハノーファー近くの小さな町で、中心街は伝統的な木組みのカラフルな家が立ち並び、まるでテーマパークに迷い込んだような気分になってくる（写真③）。



この美しい街の郊外にアンネ・フランクの死んだベルゲン・ベルゼン収容所がある。アムステルダムの隠れ家から逮捕されアウシュビッツに送られたアンネは、迫りくるソ連軍を背にベルゲン・ベルゼンに移送される。そこは「絶滅収容所」ではなかったけれど、まともな食料もなく、飢えとチフスの蔓延により毎日多くの収容者が死んでいきアンネも姉とともに解放1か月前に亡くなってしまふ。アンネの遺体が確認されるような状況ではなかったけれど、今収容所跡には多くの墓の中にアンネ姉妹の墓も建てられ献花が絶えない（写真④）。



美しい農村地帯を通り、収容所跡に着くと展示棟があり多くの写真や遺品などで収容所の歴史がわかるが、ここには当時の建物は全く残らず、ただ森林と草原が広がるばかり。チフスの蔓延を防ぐために解放後全ての建物が焼却されたからだそうだ。ここはイギリス占領地になったためか、同じイギリス統治のパレスチナにこの収容所解放者から多くの人が送られ、バルフォア宣言によるイスラエル建国につながるのも歴史の裏側の真実として見ておく必要があると思う。

リューベックはハンザ同盟の中心となった都市で当時の繁栄の様子が旧市街に残る教会の  
高い尖塔群やホルスティン門の偉容さからしのばれる（写真⑤）。



旧市街北門にある博物館でハンザ同盟の歴史を詳しく見ることができるが、ハンザ同盟が決して平和的手段で維持されたのではないことは、斬首された敵の首が並べられたジオラマからも想像できる。この町はしかし知的文化が花開いたところだった。それはリューベックがノーベル賞受賞者3人と関係していることからわかる。まず「ベニスに死す」など書いたトーマス・マンの生家があり、また東方外交により東西和解を進め、ワルシャワのユダヤ人ゲットー跡の記念碑にひざまずいてナチスの罪を謝罪したウィリー・ブランツ首相の生家と記念館がある。そしてブランツ記念館と裏庭を共有して「ブリキの太鼓」などで有名なギュンター・グラスの住家であった記念館もあった。この3人はノーベル文学賞（マン、グラス）、平和賞（ブランツ）をそれぞれ受賞している。グラスはグダニスク（当時のダンティヒ）生まれだが、社会民主党のブランツを一貫して支持してきた関係でこの町に住むことになりここで亡くなったようだ。

今回廻った中で最大の都市**ハンブルク**、しかし町の中心には大きな美しいアルスター湖があり、この都市の風格を高めている。アルスター湖を縦断し、郊外に続く運河をめぐるクルーズ船は、急に訪れた夏を満喫しようとする水着姿の人たちがボートやヨットなどで楽しむ姿が見られた。ハンブルク市立美術館は膨大な作品が並べられ、中世絵画からフランドル絵画、フランス印象派、さらにクラナハ以後のドイツの画家の作品が展示され見るだけで疲れてしまうほど。ドイツの画家については日本ではあまり知られていないようだが、見ごたえのある作品が数多くある。もう少しドイツ美術の歴史を調べておけばよかったと後悔。

郊外に電車で行くと、エルベ川沿いの広大な貴族の館を含む公園に「バルラッハ美術館」がある。近代の彫刻家として有名らしいがあまり知らない人だ。バルラッハの彫刻は優しくまた厳しく情感がそのまま伝わってくるような表現力を持った作品だ（写真⑥）。



圧政への怒りと抵抗の彫刻群も圧倒される。同時に特別展としてこれも未知の「ヨセフ・シヤール展」をやっていた。ナチスへの怒りが込められた作品が多く、またアインシュタインの知己であったので彼を描いた肖像画も数品並べられていた。シヤール自身もアインシュタ

インと同様にアメリカに亡命せざるを得なくなっただけらしい。

ハンブルク市立博物館では“REVOLUTION！？”と称して未完のドイツ革命展をやっている。興味深かった。第一次大戦を終結に導いたドイツ革命であるが、ローザ・ルクセンブルク等が虐殺され未完に終わってしまう。当時の軍反乱、労働者蜂起が潰され、やがて虚弱なワイマール体制そしてナチスの時代に続く時代を考えると胸が痛くなる。常設展示ではナチスに斬首された共産党員の写真などがあり、政治犯収容所として始まったものが後にユダヤ人絶滅収容所まで発展する歴史の酷さの原点がこの時点にあったことも思いやられる展示だった。

美しい田園風景、旧市街、素晴らしく刺激的な美術品の数々、そしておいしい食事、ビールなど十分楽しみながらもいろいろと考えさせてくれるドイツ北西部の旅だった。

(土代 武)